腹腹時計

特別号 1

東アジア反日武装戦線KF部隊(準)

発行日 1979年5月19日

発行 東アジア反日武装戦線KF部隊(準)
(葛飾区小菅1-35-1)

連絡先 KQ通信社(東京都下谷郵便局 私書箱99号)

頒価 300円

目次

日帝本国人	2
友へ！ 反日武装闘争の前進に向けて！	13
F A R N の “ 戦闘指示 ” に応えよう	31

日帝本国人

息子よ

オマエのぶあつい獄中手記を
父は今やつと読み終えた

外は雪

昨夜から降りつづける雪模様は

父にシベリアの恐怖をよび起こす

獄の冬は思ったより寒かろう

獄寒にもめげずに

かじかむ手に息を吹きかけ

腕の痛みをこらえつつ

手記を綴るオマエの姿を

父は眼に浮かべて

しっかりと受けとめている

父にも獄寒の体験がある

オマエから言わせれば

反革命兵士として

父はスターリン体制下の

シベリアの監獄に

とらわれていた

かつての戦友どうしが

いがみ合い

けたおし合う

ラーゲリを生きのびて

父は内地に帰還した

敗残の皇軍兵士は

スターリン体制下のラーゲリで

ゴリゴリの反共主義者に成長して

敗れた祖国に帰還した

オマエが共産主義に

かぶれてからというもの

父はオマエを息子とは

思つてこなかった

それはオマエにとつて

望むところだったろう

オマエは父を糾弾する

天皇から銃をいただいで

皇軍兵士として

外地に出征したことを

オマエは父を糾弾する

朝鮮人を虐殺し
中国人を虐殺し
モンゴル人を虐殺し
奪い尽くし
焼き尽くしたことを
オマエは父を糾弾する
なぜ侵略戦争に
反対しなかったのかと
なぜ皇軍兵士になることを
拒否しなかったのかと
なぜ天皇に銃を向けず
被植民地人民を殺したのかと
だが息子よ
オマエは戦争を知らん子供だ
せいぜい知識としてしか
知らない子供だ
当時の国民にとつて
天皇は絶対だった
国家の命令は
天皇の命令であり
上官の命令は
天皇の命令だった
天皇の命令にはむかうなど

論外だった
ましてや天皇の命を狙うなど
問題外だった
それは自殺行為に等しかった
父は確かに
朝鮮人を殺害し
中国人を殺害し
モンゴル人を殺害した
しかしそれは戦争という
国家行為の中の
上官の命令に
基づいたものなのだ
父は皇軍兵士であり
天皇の命令には
従う以外なかったのだ
しかしオマエは糾弾するだろう
たとえ上官の命令であろうとも
責任のなれはできないと
だがそれが軍隊というものなのだ
オマエには理解してもらえまいが
それが戦争というものなのだ
虫も殺せぬ少年兵が
一夜にして

殺人マシーンにひょう変する
それが戦争というものなのだ
しかしオマエはなおも
父を厳しく問いつめるだろう
今の父が
再び天皇に命令されたなら
侵略戦争に参加して
被植民地人民に
銃口を向けるのかと
今の父には答えられまい
オマエにはつきりと
約束はできまい
オマエたちの行為は
昔で言えば大逆罪だ
極刑ものの国賊で
即決ものの非国民だ
今も世間の人たちは
声を大にして叫んでいる
一日も早く死刑にしろと
だが父は世間の人たちと
唱和する気にはなれない
それはオマエがオレの息子
だからではない

敢えて誤解を恐れずに言うならば
オマエは父にとつての
一つの救いだ
感じはじめたからなのだ
オマエの言う日帝が
アイヌモンリを強奪し
ウチナーを併合し
台湾を占領し
朝鮮を植民地支配し
中国大陸に侵略し
インドシナを
マラヤを
ビルマを
フィリピンを
インドネシアを
パプアを
南太平洋の島々を
軍靴で踏みつけ
銃剣で荒し回ったということ
父は否定する根拠を
もっていない
戦後の日本が
米帝の朝鮮侵略戦争によって

帝国主義として復活し
米帝のベトナム侵略戦争によって
主力帝国の座にのし上がり
アジア
アフリカ
ラテンアメリカからの
新植民地主義収奪で
肥え太り
膨脹し
日帝本国人の生活は
アジア
アフリカ
ラテンアメリカの人々の
犠牲の上に
成り立っているということを
父は否定する根拠を
もっていない
だから日帝本国人は
寄生虫的存在であり
共産主義的解放のためには
オノレの寄生虫的在りようを
自ら否定しなければならぬ
ということ

父は否定する根拠を
もっていない
オマエの言う共産主義が
ソ連式社会主義とも違うこと
中国式社会主義とも違うこと
自然と人間が融合し
皆が協力し合い育み合う
自由平等な共同体である
ということ
父は父なりに理解しよう
だが少数者の
バクダン・ゲリラ・銃撃戦で
オマエの言う革命が
勝利するものだろうか
父の疑問に対して
オマエは言うだろう
革命は
座してはやってこない
革命は
熟柿が落ちるのは
訳がちがうのだと
武装闘争こそが
革命情勢をつくり出し

武装闘争こそが
本国と植民地との
革命闘争を同質化し
武装闘争こそが
未来社会の土台を
築き上げるのだと
確かにオマエの
言う通りかも知れない
だがかつて
人民に支持されない革命が
勝利したためしがあるろうか
父の疑問に対して
オマエは言うだろう
人民の一人一人が
オノレの在りようを
変えることこそが
問われているのだと
人民一人一人が
自分自身を革命し
革命を支持するのではなく
革命の主体になるのだと
確かにオマエの言う
通りかも知れない

父はかつて戦争中
若い八路軍兵士を殺した
殺さざるを得なかった
殺される前の
その若い八路軍兵士の瞳は
革命勝利と
日本軍敗北の
絶対的確信に燃えていた
父はその気迫に恐怖した
今父は
オマエの中に
その若い八路軍兵士を
見てしまう
これだけは確認しよう
父とオマエの間には
深い大きな河がある
この河を
渡らなければならぬのは
この父だ
この老いさらばえた父に
渡河は厳しく困難だ
だがいかに厳しく
困難であろうとも

たとえ渡り切れずに
溺れ死のうとも
その一步を
踏み出さねばならぬのだ
父が殺した
あの若い八路軍兵士の
反日魂を
オマエとともに
生き返らせるために
それこそが
この父にとつての
オトシマエのつけ方なのだ

(一九七九・二・六)

東アジア反日武装戦線 K F 部隊 (準) 兵士 B